

古川薫

十三人の修羅



十三人の修羅

古川薫

講談社

十三人の修羅 定価九八〇円

昭和五十二年十月二十日 第一刷発行

著者 古川 薫

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(945)一一一一(大代表)

振替 東京八一三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 株式会社 黒岩大光堂

著者本・乱丁本はお取り替えます。

© 古川 薫 昭和五十二年 Printed in Japan

著者紹介

大正十四年、下関市生まれ。山口大学卒。新聞記者を経て作家となる。

昭和四十年「走狗」、同四十八年「女体蔵志」、同四十九年「塞翁の虹」で直木賞候補となる。

主なる著書。「討賊始末」「長州歴史散歩」「高杉晋作」「海と西洋館」ほか
に共著「西国の城」「西国人物誌」



目次

燃える公使館	五
再会	五一
仏師の家	八九
戦雲	一一七
疾風のあと	一五四
忿怒と微笑	一七七
燃え残りの記	二三六

装
幀

三
井
永
一

十三人の修羅

燃える公使館

1

横浜に居留する英国人たちにとって、その日は、一八六三年一月の第一日曜日にあたった。陰暦の日本では、まだ年を越していない。つまり文久二年十一月十五日である。

凍^いてついて、堅く干からびた朝の神奈川街道に、ほんのりと薄日がさしている。いつもなら、長身をつつんだ羅紗の防寒衣を、蝙蝠^{トリス}のように馬上にひろげた、異相の男女の一群が、沿道の人々の目にうつる筈だった。軽快な速歩^{トリス}の蹄の音を響かせ、好奇にみちた青い眼差を、あたりに振り撒きながら、彼らは日曜日毎に、近郊を遊歩するのである。

だがこの日ばかりは、外国奉行からの急報があり、外出の予定を中止しなければならなかった。暴徒が狙っているというのだ。

狂気にとり憑かれた長州藩の若者による異人襲撃計画が発覚していなかったら、また何人かの英国人が、奇妙なサムライの国の、港町のはずれで、血ぬられた安息日を迎えるところだった。

足止めをくった異人たちが、大袈裟に肩をすばめる例の仕種で、きょうは茶会でもやろうかなどと話しているころ、神奈川台の旅宿下田屋二階にも、動きのとれなくなった男たちが息を

ひそめていた。この方は、あまり風采のあがない田舎侍十一人である。

八月には、薩摩藩士が、英国人を斬り捨てた生麦事件が起きている。薩摩に攘夷の先を越されたという長州人の単純な焦りもあったのだろう。事前の大仰な気負いが、この粗暴な計画を露見させてしまった。

その朝、足場にした宿を出発しようとする直前、数十人の捕手に包囲されているのに気づいたのである。半刻ばかり脱出の機会を窺ったが、囲みを解く気配がない。宿から出てくるのを、辛抱強く待っているようだった。

「とにかく、血路を開いて逃げるしかないじゃろう」ということになった。このまま刻が過ぎると、捕手の人数も増えて、ついには突入してくるかもしれない。各々襷をかけ、袴の股立ちをとり、いつでも打って出られるように支度を整えた。

緊張した顔が並ぶ部屋の東側の油障子に、うつすらと冬陽があたっている。その窓際に若い侍が一人、皆から少し遠ざかるようにして坐っている。最年少の瓜生慎蔵である。秀麗な面ざしが窓からの光を浴びて、白く輝いていた。描いたように濃い眉の付け根から下りた高い鼻梁が、彫像を思わせる冷たい影をつくっている。

障子に写る枯木の枝先を揺らして、小鳥が止まった。ちらつとそれに目をやってから、慎蔵は、もう一度念を入れて刀の目釘を調べ、体温であたたまった畳から、ゆっくり腰を浮かした。

途端に、木枯しの悲鳴だ。思わず身ぶるいして、向い側の壁に凭れている伊藤俊輔を見ると、彼もまた、ひどく蒼ざめているのだった。寒さのせいだけではあるまい。

(怯えているのだ、私も)

瓜生慎蔵は、一瞬、自分を恥じながら、めずらしく俊輔への親しみを覚えた。ひよっとすると一緒に命を落とすかもしれないという予感が、目頃あまり好きでないこの男に対する慎蔵の心を、ふと軟らげさせたのだろう。

厠に立とうとしたとき、階段を踏みならす音がし、やがて抑えた声が、冷たく激んだ室内の空気をふるわせた。慎蔵は、ふりむいて、入口のあたりに立っている精悍な高杉晋作のあばた面に、視線をそそいだ。

「敵は多勢じゃが、雑魚^{ぞこ}どもだ。鉄砲も持ってはおらん。なるべくなら斬り結ぶなよ。一目散に江戸へ逃げこめ。今晚、代々木の例のところで会おう。尾行^{つぎ}られるな、ええか、わかったか」

高杉が、早口に下知する間も、高い空で、風の音が走った。

「代々木の例のところちゅうのは、斎藤弥九郎先生の別邸であつたのう」

「そうであります」

白井小助と山尾庸三が、のんびりした口調で話している。

「今夜あたりは、品川で、女のところへ潜りたいものだのう」

「ええ考えですな。それにしても白井さん、品川へ着くまでが大変ですよ」

「そういうこと」

「外で困まれでもしたら、どのみち闘わにやなりませんな。幕吏を斬ると、あとがうるさいじゃろうが……」

そこで、別の声がさえぎった。

「そのときや遠慮なく斬れ。だめなら死ぬだけさ」

ジロリと山尾らの方を見て、無造作にいいながら、瘦せた肩をそびやかすようにして、高杉は重い刀を腰に差した。どう見ても彼には長すぎる刀だ。自慢の長剣で、二尺六寸はある。

「晋作の奴、生意気に江戸弁を使いくさって、何をひとりでイキがっちやるそか」

独眼竜と仇名される浅黒い顔を歪めて、皮肉な笑いを見せながら、白井小助が例によって毒づいた。皆が立ち上がるざわめきの中で、小助の周囲の者だけ思わず失笑したが、すぐに表情を硬ばらせた。

「気をつけいよ、慎蔵」

後ろから赤根武人たけとに肩をたたかれ、押し出されるようにして、廊下に出た。すでに抜刀した者もいるが、慎蔵は居合をやるので、鯉口だけ切って、階段を降りた。

「行くぞ」

高杉が真っ先に外へ飛び出して行く。十人が吼えながらそのあとに続いた。走れるだけ走ろうと、慎蔵は思う。刀の柄に右手を添え、前かがみの居合腰で、彼は走りだした。

追いつめられた者たちの、けもの臭い氣勢に怯んだのか、道を塞いでいた捕手の列が乱れ、二つに割れた間を突切って、街道を走り抜けると、広々とした畑地と、その先に森が見えた。

慎蔵は、その森にむかって駆ける。喘ぎながら、なぜか故郷の風景が脳裡に浮かんできた。長門国長府、毛利の支藩五万石の城下町だ。南に茫洋とした周防灘、西には関門海峡を距てて、九州の山の端が、海に崩れ尽き、その上を、青い空が覆っている。——空は、たちまち現実の神奈川の冬空となり、いつの間にか、目の前に森が立ちはだかっていた。寺院の屋根が、潤葉樹の茂みから、わずかに覗いている。

高い土塀に沿って走り、曲り角の手前で、慎蔵は、はじめて後ろをふりかえった。畑が陽を受けて一面に広がり、その中を散って行く仲間たちのふりかざしている刀が、針ほどの輝きを見せ、間もなく土の色に吸われようとするところだった。そのむこうで、捕手の姿が、豆粒を散らしたように動いている。

再び走りだした瞬間、出会いがしらに、慎蔵は、ドスンと鈍い衝撃を覚えた。小柄な町娘が、目の前にころがっている。女は「痛い」と短かい声をあげ、起きあがろうとしたが、よろめいて再び崩折れた。

「済まなかった」

そのまま走りすぎ、十歩ばかりも行って、ふりかえると、娘は、まだうずくまった恰好だ。二重瞼の大きな黒目が、慎蔵を睨んでいる。彼は、頭をさげ、やはり行こうとした。

「待っとくれやす！」

鋭い声が、慎蔵の背に突き刺さった。

「痛みますか、動けんのでありますか」

慎蔵は、仕方なく後戻りして、娘に声をかけた。追われていることを告げ、許しを乞うつもりである。

「お武家はん、追われたはりますんやろ」

細い三日月の眉をしかめながら、娘が、先にそのことをいった。

「そうであります」

「襷を取らしたらどないどす。それから、袴の裾も、ちゃんとおろした方がよろしおすえ」

うずくまったまま、いくぶんはまだ顔をしかめながら、指図するようにいう。慎蔵は、素直に襷をはずし、袴の股立ちを解いた。

娘は、足首をさすっている。捻挫したらしい。捲れた着物の裾から覗いた透き通るような皮膚の白さが眩しく、慎蔵は、急いで外らした視線を、畑の方にむけた。数人の追手の影が、次第に大きさを増しながら、こっちへ近づいてくる。

「さあ、手をかしてあげます。立って下さるんですか」

慎蔵は、豊かな肉づきを感じられる女の腕を、いきなり掴んだ。

「うちと二人連れなら怪しまれへんどすやろ。あ、ええこと思いつきましたえ。うちをつれて、このお寺さんの中に這入って下さい。うちら、ここに泊ってるんどっせ」

「この上、迷惑をかけとうない」

「そんなこと、よろしおす」と笑って「早よう行きまひよ。おぶってくれはらしまへんやろか」

「はあ」

慎蔵は、筋肉質の長身を折って、不器用に女を背負うと、寺の門にむかつて走った。しがみついている女体のぬくもりが伝わってくる。自然に顔が赫らんだ。

「あっちどす」

庫裡の方を、肩越しにゆびさした。

方丈に近い板張りの部屋に慎蔵が隠れて、しばらくしてから、探索の者が、寺にやってきた。

「お侍はんなら、門の前を走って、あっちに行かれました」

「この女性にぶつかってそのまま逃げたという若い武家がそれじゃろう。当山には立ち寄ってお

りませんぞ」

住職の声である。

幕吏たちは、納得して帰って行った。

ようやく安堵して、慎蔵は、埃をつんだ床の上に大の字になった。ほっとすると、にわか寒さがおそってきた。汗に濡れた下着が、冷たく身体にまといついている。

「ええのんか、お寺はんにご迷惑のかかることはないやろな」

と、違う声が出ている。

「心配あらへんて、お父はん。悪人かどうかうちにはようわかつてるさかいに」

「どないして、それがわかるんや」

「悪い人なら、突き当っても、そのまま行ってしまう。追手が近くまで来てるのに、うちに詫びをいわりました」

「うむ、拙僧の見た限りでも、お娘御がいわれる通りじゃ。それに、お侍は、なかなかの男ぶり、助けたくなるであらう。のう美緒さん」

「そんなこととちがいます」

「いや、子供るときから悪戯好きで、この親を困らせてますのや。こんども、ついてくるいうてきしまへん。どないしても江戸見物をするいうて。江戸は物騒で、見物でもありしまへんなあ。神奈川で、もうこれやさかい」

「異人が暮らしておりますからな。尊王攘夷の志士が、いつもうろうろしておりますよ」

「京にも、仰山、浪士がいてます」

「ああ、美緒さん、あの侍、ここへ呼んできなされ」

「もう一度、外の様子を見てからにした方がよろしおすなあ」

「それがよからう。足の工合はよろしいのかな」

「もう、なおりました」

と笑って、美緒が立って行く気配がし、しばらくして廊下から声がかかった。

「大丈夫どっせ。だれもいやはらしまへん」

「はあ、では、その……」口ごもっていると、

「なにしていますの」

勢いよく板戸をひきあけて、美緒が笑った顔を出した。

「和尚さんそこへ行きまひょ」

「造作をかけました」

「さあ、待ってはりますよ」

「では、住職殿にもお礼を……」

「いうといっておくれやす。和尚さんおっも、せんど、お侍はんのこと、庇うておくれやしたさかい」

美緒は、先に立って歩いて行く。

「足は痛みませんか」

後ろから、慎蔵が遠慮がちに声をかけると、美緒は、ふりかえって、悪戯っぽく笑ってみせた。

「あの、ほんまのことをいいまひよか。歩けへんいうたのは、あれ嘘どす」

云い捨てて、クルリと背をむけた。子供じみた仕種だが、その後姿には、ふくよかな女の気配が匂っている。慎蔵は、方丈の間に入り、武骨に両手を畳についた。

部屋では、恰幅のよい僧侶と、老人にしては目の澄んだ、小柄な白髪の人が、それとない観察の視線をむけて、慎蔵を迎えた。

「長州藩士、瓜生慎蔵であります。危いところをお助けいただき、感謝しちります」

「礼は、この娘御にいいなさい」

「お礼は、もういわはりました」
美緒は、小さな鼻がつんと盛りあがった横顔に笑みをただよわせながら、急須に湯を注いでいた。

「こちらは京都の櫛田光倫殿と御息女的美緒さん、わしは当山の住職真然といいます」
と、僧侶が話しかけてきた。

「ところで、貴殿は何をされたのじゃな。いや、話したくなければ、強いて訊くつもりはないが……」

「何もしておらんです。しようとして、出来なかったというべきかもしれません」

「攘夷ですか」

「はい」

「ジョーイて何です」

と、美緒が口をはさんだ。

「やめときなはれ」

光倫が、娘をたしなめた。

「まあ知っておいて損にはなるまい。攘夷とはな、一口に言えば異国嫌い、つまり、外国を撃つという意味じゃ。公儀が外国に港を開いた、それに反対する人たちのことを攘夷派といいます。いまそのことで賛否両論が渦巻いておる。攘夷とは、こう書くのじゃ」

住職の真然は、筆をとり、半紙に大きくその字を書いて、美緒に見せた。

「ほなら、瓜生さまは、攘夷派のお侍はんどすなあ」

「そうじゃ。攘夷というてもいろいろやり方があるが……」

「異人を殺すつもりでした」

真蔵は、少し胸を反らすようにしていった。そんな彼を、真然は、なかば憐れむように、ちょっとの間、凝視していたが、穏かな声で、

「異人を殺して、どうなさるおつもりかな」

「異人を放逐し、天朝を中心にあたく新しい国をつくります」

「では、幕府はどうなります」

「この国は、もともと天朝のしろしめすべきもの。幕府は順逆を誤っております。しかも異国に對して、あまりにも弱腰なれば、異人どものいうがままにされちよるではありませんか。清国のアヘン戦争をご存知でありますか。自国を外夷に踏み荒らされて、なすすべを知らぬ有様と聞いております」

「なるほど、それで異人を殺すといわれるのか」

「そうですあります」